

toVO トグモ
PLUS

www.tovo2011.com

SEASON 2



NO. **012**
20130311

あおもりの100家族、わたしたちのこれから。



インタビュー

今号のご家族▶黒澤 智さん・咲子さん・明莉ちゃん
あかり
撮影場所▶青森市三内

●震災後、福島県白河市から青森に避難してきたのはいつ頃ですか?▶咲子さん「一昨年(2011年)の11月です。から、1年4ヶ月になります。」 ●2011年3月11日のことをお話頂けますか?▶智さん「その日は、妻は仕事で、私は仕事を休んでました。娘はまだ生後6ヶ月。地震が起こって、すぐに託児所に娘を迎えに行きました。子どもたちは近くの老健施設へ避難していて、子どもたちと老人たちが肩を寄せ合って集まっていた。とても寒い日で、娘を抱きかかえ、そのまま妻の勤め先の歯科医院へ向いました。すると、妻は往診に出かけて連絡が取れないって言われて、娘と2人で家に戻って。余震も大きく、家に戻ると中は酷い状態で、娘を寝かす場所もなかったです。地震の少し前に、凄く低周波で地鳴りがするんですよ。窓が微かに揺れて、だんだん大きくなってガタガタって。それが何度も何度も。その度に娘が怖がって泣き出して。」 ▶咲子さん「私は老健施設で往診中でした。誰かの携帯の地震速報が鳴って、なんだらうって思っているうちに大きな揺れがきました。施設は耐震だったんですけど、揺れが大き過ぎて立ってることでもできなかったです。大きかったねーなんて話している間にも、次から次へと地震がきて。電気も消え、TVも消え、その辺からあんまり記憶がなくて、どうやってその施設から出たのか憶えてないんです。マンホールが飛び出でて、水道管は破裂して、知人の家は半壊して。娘や夫とも連絡がとれないし…」 ●次の日は?▶智さん「幸いアパートは被害も少なく、また、住んでいた地域はライフラインが生きていたんです。ですから、私も妻も次の日から仕事をしていました。次の日(12日)に起こった福島第1原発1号機の水素爆発も、水素だから大丈夫だよと、まだそんな感じでした。その後、次々に水素爆発を起こしましたけど、TVを観ながら、ただだよーって感じてました。その頃から、放射能の危険性に関するチェーンメールが大量に届くようになったんですが、これ以上不安を煽るなよって(笑)」 ▶咲子さん「次の日は託児所に連絡がつかず、私は娘をおぶって仕事をしていました。原発事故が起きたその日は雨が降っていて、職場では冗談で黒い雨だねーなんて言っていて。帰りも雨だったんですけど、全く危機感はなく、その時、娘に雨を当ててしまったんです…それを今でも悔やんでいますね。」 ●どのような経緯で避難することになったんですか?▶智さん「放射線を意識するようになったのは4月くらい。ネット等で毎日の線量を調べて、累計的に計算していったら、ここで暮らしているのはヤバいぞ!って、6月頃に知人の医師に相談しました。放射線って身体に蓄積して溜まっていくから、大丈夫とは言い切れないし、娘さんの事を考えたら、奥さんの実

家(東北町)に行った方がいいんじゃないかって。知らない土地に行っても半年もあれば何らかの仕事に就いて生活できるでしょう?でも、娘さんが将来的に癌を発病し普通の生活ができないことになったらどうする?って。そこから真剣に避難を考えはじめました。」 ▶咲子さん「娘のミルクは?オムツは?からはじまり、マスクしなきゃ、食べ物に気をつけなきゃ、仕事に行かなきゃで必死でした。ある日、ガイガーカウンターを借りてきて、家の中を計ったら凄く線量だったんです。娘が子どもの頃に福島に住んでいたことで、将来、辛い経験をしてしまったらどうしようと。やはり、娘のことが一番で、娘がいなかったら避難してないですね。」 ●震災から約7ヶ月後、青森での新生活がはじまります。▶智さん「福島ではどこに行っても産地と放射線量が表示されて、常にそれを意識しなきゃいけなかったんです。TVも放射線量のテロップが常に表示されて、とにかく安全か危険かの毎日。青森来てからも、そんな福島での生活が染み付いていました。青森に来て、ホッとした反面、どこか精神的に落ち着かなくて、常にイライラしてました。なんで皆こんな呑気に暮らしてるんだらうって思っていましたね(笑)」 ▶咲子さん「やっぱり福島が故郷なんだろうね。当初は青森に馴染めなくて2人で泣いてました(笑) 青森に来て放射能から解放されたかって言われると、やはり今でも気になるし、解放感はありません。」 ●今の生活は?▶智さん「うーん、まだ青森に慣れてないかなあ。福島からの避難者は全国に沢山いて、私たちは青森に来たけど、やはりどこかよそ者って感覚があるんです。その経験を踏まえ、同じ境遇の方の手助けをしたいと考えています。」 ▶咲子さん「最近、やっと気持ちに余裕が出てきました。やはり、福島に帰れるなら帰りたいと思っていて、その為には、まず自分たちが前向きに福島の為に何かできないかなと考えています。」 ▶智さん「今は青森に来て、故郷福島の為に何にもできないことがホントもどかしいですね。」 ●10年後って想像できますか?▶智さん「娘が放射線の影響もなく、健康に成長してくれていたらと思います。この娘が健康でいてくれて、はじめて青森に来て良かったと思えるんでしょうね。」 ▶咲子さん「娘にはいつかこの事を話できるように記録をしています。何事もなく中学に入学したらイデすね。将来的なビジョンは決まらず、ずっと青森の職場で働いていたいと思う反面、福島の元の職場に戻りたいとも思います。帰れるか、帰れないか分からないけど、でも、私たちがとって、福島はいつでも帰れる場所で、それがあから、今の生活も安心できるっていう感覚があります。」▶智さん「そうだね。まだ転勤とか、出張に来てるって感覚なのかもしれないよね(笑)」

定期購読のお申し込み 1年間の定期購読を承ります。1,500円(送料・寄付金)/1年間(12号)です。ご希望の方は、「郵便番号・ご住所・お名前」を明記の上、メール(info@tovo2011.com)にてお申し込みください。シーズン1(No.000~No.011/12号セット)は、1,500円で販売中です。

編集後記 1年間発行してきたtovo plus、今号で2年目突入。シーズン(2)の最初は、震災後、福島から避難して青森で暮らしているご家族。「忘れないって何?」をコンセプトに発行してきましたが、今号は「忘れたくても、忘れられない」ご家族、彼らも僕たちと同じように、この青森に暮らし、生きていて、だから、僕はどうしても彼らを「あもりの100家族」に加えたくて登場して頂きました。【小山田 和正】

東日本大地震・津波遺児チャリティー

tovo トヴオ

2011年6月~2013年2月28日まで

¥1,350,741

を「あしなが東日本大地震・津波遺児基金」へ寄付することができました。ご協力に感謝いたします。

【tovo/トヴオ】は、2011年3月11日の東日本大震災によって、親を失った子どもたちを、青森から支援するプロジェクトです。チャリティーグッズを制作・販売し、その経費を除いた全ての収益を、あしなが育英会「あしなが東日本大地震・津波遺児基金」へ継続的に寄付し、青森から「あなたがたのそばにいつもいますよ」と伝え続けます。ご支援・ご協力を宜しくお願いいたします。



今号のご家族▶黒澤 智さん・咲子さん・明莉ちゃん

撮影場所▶青森市三内

【インタビュー】

●震災後、福島県白河市から青森に避難してきたのはいつ頃ですか？

▶咲子さん「一昨年(2011年)の11月ですから、1年4ヶ月になります。」

●2011年3月11日のことをお話頂けますか？

▶智さん「その日は、妻は仕事で、私は仕事を休んでました。娘はまだ生後6ヶ月。地震が起って、すぐに託児所に娘を迎えに行きました。子どもたちは近くの老健施設へ避難していて、子どもたちと老人たちが肩を寄せ合って集まっていた。とても寒い日で、娘を抱きかかえ、そのまま妻の勤め先の歯科医院へ向いました。すると、妻は往診に出かけてて連絡が取れないって言われて、娘と2人で家に戻って。余震も大きく、家に戻ると中は酷い状態で、娘を寝かす場所もなかったです。地震の少し前に、凄い低周波で地鳴りがするんですよ。窓が微かに揺れて、だんだん大きくなってガタガタって。それが何度も何度も。その度に娘が怖がって泣き出して。」

▶咲子さん「私は老健施設で往診中でした。誰かの携帯の地震速報が鳴って、なんだろう？って思っているうちに大きな揺れがきました。施設は耐震だったんですけど、揺れが大き過ぎて立つこともできなかつたです。大きかったねーなんて話をしている間にも、次から次へと地震がきて。電気も消え、TVも消え、その辺からあんまり記憶がなくて、どうやってその施設から出たのか憶えてないんです。マンホールが飛び出でて、水道管は破裂してて、知人の家は半壊してて。娘や夫とも連絡がとれないし...。」

●次の日は？

▶智さん「幸いアパートは被害も少なく、また、住んでいた地域はライフラインが生きていたんです。ですから、私も妻も次の日から仕事をしていました。次の日(12日)に起こった福島第1原発1号機の水素爆発も、水素だから大丈夫だよねと、まだそんな感じでした。その後、次々に水素爆発を起こしましたが、TVを観ながら、ただだよーって感じでした。その頃から、放射能の危険性に関するチェーンメールが大量に届くようになったんですが、これ以上不安を煽るなよって(笑)」

▶咲子さん「次の日は託児所に連絡がつかず、私は娘をおぶって仕事をしていました。原発事故が起きたその日は雨が降っていて、職場では冗談で黒い雨だねーなんて言っていて。帰りも雨だったんですけど、全く危機感はなくて、その時、娘に雨を当ててしまったんです...それを今でも悔やんでいますね。」

●どのような経緯で避難することになったんですか？

▶智さん「放射線量を意識するようになったのは4月くらい。ネット等で毎日の線量を調べて、累計的に計算していったら、ここで暮らしているのはヤバいぞ！って、6月頃に知人の医師に相談しました。放射線って身体に蓄積して溜まっていくから、大丈夫とは言い切れないし、娘さんの事を考えたら、奥さんの実家（東北町）に行った方がいいんじゃないかって。知らない土地に行っても半年もあれば何らかの仕事に就いて生活できるでしょう？でも、娘さんが将来的に癌を発病し普通の生活ができないことになったらどうする？って。そこから真剣に避難を考えはじめました。」

▶咲子さん「娘のミルクは？オムツは？からはじまり、マスクしなきゃ、食べ物に気をつけなきゃ、仕事に行かなきゃで必死でした。ある日、ガイガーカウンターを借りてきて、家の中を計ったら凄い線量だったんです。娘が子どもの頃に福島に住んでいたことで、将来、辛い経験をしてしまったらどうしようと。やはり、娘のことが一番で、娘がいなかったら避難していないですわね。」

●震災から約7ヶ月後、青森での新生活がはじまります。

▶智さん「福島ではどこに行っても産地と放射線量が表示されてて、常にそれを意識しなきゃいけないかったです。TVも放射線量のテロップが常に表示されてて、とにかく安全か危険かの毎日。青森来てからも、そんな福島での生活が染み付いていました。青森に来て、ホッとした反面、どこか精神的に落ち着かなくて、常にイライラしてました。なんで皆こんな呑気に暮らしてるんだろうって思っていましたね(笑)」

▶咲子さん「やっぱり福島が故郷なんでしょうね。当初は青森に馴染めなくて2人で泣いてました(笑) 青森に来て放射能から解放されたかって言われると、やはり今でも気になるし、解放感はありません。」

●今の生活は？

▶智さん「うーん、まだ青森に慣れてないかなあ。福島からの避難者は全国に沢山いて、私たちは青森に来たけど、やはりどこかよそ者って感覚があるんです。その経験を踏まえ、同じ境遇の方の手助けをしたいと考えています。」

▶咲子さん「最近、やっと気持ちに余裕が出てきてました。やはり、福島に帰れるなら帰りたいたいと思っていて、その為には、まず自分たちが前向きに福島の為に何かできないかなと考えています。」

▶智さん「今は青森に来て、故郷福島の為に何にもできないことがホントもどかしいですね。」

●10年後って想像できますか？

▶智さん「娘が放射線の影響もなく、健康に成長してくれていたらと思います。この娘が健康でいてくれて、はじめて青森に来て良かったと思えるんでしょうね。」

▶咲子さん「娘にはいつかこの事を話できるように記録をしています。何事もなく中学に入学したらいいですね。将来的なビジョンは決まっておらず、ずっと青森の職場で働いていたいと思う反面、福島への職場に戻りたいとも思います。帰れるか、帰れないかわからないけど、でも、私たちにとって、福島はいつでも帰れる場所で、それがいるから、今の生活も安心できるっていう感覚があります。」

▶智さん「そうだね。まだ転勤とか、出張に来てるって感覚なのかもしれないよね(笑)」

【編集後記】1年間発行してきたtovo plus。今号で2年目突入。シーズン[2]の最初は、震災後、福島から避難して青森で暮らしているご家族。「忘れないって何？」をコンセプトに発行してきましたが、今号は「忘れたくても、忘れられない」ご家族。彼らも僕たちと同じように、この青森に暮らし、生きていて、だから、僕はどうしても彼らを「あおもりの100家族」に加えてたくて登場して頂きました。【小山田 和正】

【寄付総額】

2011年6月～2013年2月28日まで、『¥1,350,741』を「あしなが東日本大地震・津波遺児募金」へ寄付することができました。ご協力に感謝いたします。